

助数詞「枚」の史的展開について

王 鼎

要旨 日本語の助数詞「枚」は、高い汎用性を持つ中国語の量詞「枚」に源を發しながら、独自の意味変遷を辿り、用法が特化して、主として〈薄く平たい〉ものを数える助数詞となった。本論文では、助数詞「枚」の史的展開について、通時的な考察を行い、〈薄く平たい〉ものを数える用法の形成には、縦軸には伝承の力と、横軸には〈薄く平たい〉という使用意識による用法の再統合の力があるという結論を導いた。

キーワード 助数詞 量詞 枚 一枚 意味変化

助数詞“枚”的历史演变

概要 日语中的助数词“枚”，源自中文的泛用量词“枚”。在此基础上，发生了独自の语义演变，用法专化，主要用以计数“薄平”状物。本论文对助数词“枚”的历史演变进行了历时考察，得出结论：其计数“薄平”状物的用法的形成，纵向上有传承的力量，横向上存在计数“薄平”状物的使用意识下进行用法再整合的力量。

关键词 助数词 量词 枚 一枚 语义变化

はじめに

助数詞「枚」の史的変遷について、山田孝雄など校注日本古典文学大系

『今昔物語集』に指摘が見られ¹⁾、また、陶萍(2014)の『新編日本古典文学全集』を用いた調査がある。陶萍(2014)の調査は貴重な知見を提供したが、調査資料が文学作品に偏り、必ずしも助数詞「枚」の全容を反映できていない。そこで、本論文では、文学作品、古文書、古記録、史書類などの資料調査を通し、助数詞「枚」の語史を明らかにし²⁾、〈薄く平たい〉ものを数える用法がいかに関係形成されたかについて分析を行う。

1. 「枚」の字源と中国語の「一枚」

漢字の「枚」は、甲骨文では「𠄎」と書く³⁾。その字源の指示物については、『説文』では「榦也、可為杖、从木、从支」⁴⁾のように、木の「枝幹」とされている。古くは、「遵彼汝墳、伐其條枚」(『詩経・周南・汝墳』)など、木の「枝幹」の意味で「枚」が使用される例が見られる。

一方、「枚」の量詞の用法は、漢代に始まったものとされる⁵⁾。その由来については、清・段玉裁『説文解字注』では「毛傳曰。榦曰枚。引申為銜枚之枚。為枚數之枚」とし、劉世儒(1965)においても、計数道具「籌馬」の「枚」を経て、量詞となったと主張し、計数道具からきた量詞であるため、字源の「榦」の意味は早くも消滅し、漢代に既に相当な用法拡張を見せ、南北朝に至るともっとも汎用性が高い量詞となっているとしている。洪藝芳(2000)の調査によれば、唐代に入ると、「枚」の使用範囲は縮小し、衣類、容器、果実、昆虫及び少数の器物を数えるものとなった。張万起(1998)の考察では、唐代・宋代には、量詞「枚」の使用がなお広く見られるものの、使用範囲が次第に縮小し、さらに時代が下ると、元曲、近代の白話小説『水

1) 山田孝雄など校注『今昔物語集』第2冊(岩波書店、1960年)423頁。

2) 本論文では、漢語助数詞「枚」(「牧」など異体字と認められるもの)、及び漢字で書かれたものの中で音読みの可能性があるものを考察する。

3) 徐中舒『甲骨文字典』四川辞書出版社、2006年第二版による。

4) 漢・許慎撰、宋・徐鉉校定『説文解字』中華書局、2013年、114頁上。

5) 張万起(1998)、李建平・張顯成(2009)を参照されたい。

助数詞「枚」の史的展開について

滄伝『紅樓夢』では、出現頻度が低い量詞となり、現代では主に書き言葉で、器物道具などの無生物を数えるとされている。

全体的には、中国語の量詞「枚」は、汎用性が高く多用されるものから、用法が縮小し、使用頻度が下がって、衰退の道をたどる。中国語の量詞「枚」の用例は、まさに枚挙に遑がないゆえ、代表的な先行研究から、時代別による使用対象を纏め、表1に示す。

表1 中国語量詞「枚」の用法変遷

時代	使用対象	参考資料
漢	径寸之珠、血如豆比、木器槩、龜、大貝、索、裹葉、貨錢、名劍、鳥、車伏、高果、車放安、四分輜、小樽、小杯、中槃、小槃、案、鋪比、面衣、筆、印、劍、刀、斧、官箭、繩、葦席、大黃布、馬泉、人卷、白素帶、雞子、王瓜、雞、狗、樹。	張万起 (1998)
魏晉南北朝	[一般物類・建築物] 物、小塔、石柱、瓦、[衣食] 麥粿、鷄子、貂皮、被、簾、[一般器皿・日用什物] 瓦器、銅錮、純銀粉鈔、甌、螺杯、琉璃盃、水晶盤、瑇瑁檳榔杵、金、銅鉢、銀鉢、唾壺、香爐、雜象牙管鍼筒、漆匣、草枕、桃杖、手巾、纏鬚繩、象牙尺、骨尺、鑷子、石碑、石經、香、細腰、[生産工具・交通工具・貨幣] 柔鑊、艘艦、五銖錢、大錢、[文具・武器] 書案、硯、筆、布紙、竹簡、書刀、琉璃筆、刺虎矛、鞞戟、矛戟、鉛、寶刀、劍、匕首、斧、箭鏑、神棒、白棗、印、兜鍪、[首飾・儀仗・樂器] 金勝、金釵、金玉條脫、瑇瑁梳、鐵鏡、玉鏡臺、緞扇、青曲蓋、鼓角、律笛、[古器物] 玉鼎、古鍾、銅鐘、玉磬、銅鐸、金璽、玉璧、方石、佛牙、毛、[動物・植物] 鏤麒麟、羊、蠱蟲、毫龜、黃魚、鶉、文木、棗、橘、梨、冰瓜、白柰、瓜、橘葉、銅人、小兒。	劉世儒 (1965)
唐・五代	[建築物類] 小泥塔、木塔、小石塔、磧、塼塔、[衣食類] 胡餅、果實燒餅、鷄卵、葫蘆、席、毡帽子、黃帔、[一般器皿・日用什物] 玉壺、小竹籠、小板匣、金合、金瓶、食器、瓶、玉石舍利函、金壺瓶、金碗、銀鉢、枕、棋子、骰、寶鏡、酒杯、碗、巾、金錫杖、風箏、石鼓、六角竹、麝香、扇香、齋香、類香、絲布、刀子靶、帖子、破車輻、剃刀、金鍾、茶碾子、牙梳 [生産工具] 大磨、[貨幣] 金錢、古錢、撒帳錢、[文具] 書鎮、軸、竹簡、詔牘、竹筒、[武器] 寶劍、矢、[首飾] 玉飾器、金釵、釧、珠、[儀仗] 幡、[古器物] 古銅鏡、白環、玉龍、寶鏡、舍利、[植物] 櫻桃、橘子、紫芝、甘杏、棗?、蓮葉、桃、[動物] 猿、繩虎子、	游黎 (2002) / 洪藝芳 (2000)

	鼠、象、蟹、飛虫、蝸、胡倭子、鯉魚、狐、神龜、小蛇、蝗虫、黑蜂、[人] 鑄銅人、人形、金銀人馬、小人、病鬼、硬窮漢、[肢体・器官] 羊頭、爪甲、豹尾、臂掌骨、蚺蛇胆、[文字] 隸字。／羅纜頭、披子、雞鳴審(枕)、銅盆、胡瓶、疊子、碗、虫、桃、牙梳、大釘、棹棹、錫杖。	
宋	小銅印、蒸餅、抽替匣、木燈檠、周敦、虫。	劉月艷(2013)
元	寬袍袖、桃、安樂窩、玉蟾蜍、玉簪、斑管、太学饅頭、李、棗。／[器皿・一般什物] 端硯、春杵、銅椀、大墨、小墨、彈丸、珠、金錢、[衣食物] 皮帽、竹笠、赤魚肉餅、天花餅、餛飩、[建築物] 石神、金獅子、安樂窩、[動植物・人] 蜘蛛、鷄雛、棗、新橙、女。	彭文芳(2001)／ 鄧幫雲(2005)
明	[食物] 猪首、果子、包子、[果実] 附子、萊菔、火棗、素果、[動物] 蚩、螻蛄虫、[器物] 木燈檠、銅烏鎗、柔鉄烏鎗、黒漆竹、大釘、文筒、子石、明珠、菓葉碗、玉環、十二時輪子、国璽、通犀小盒、烏絲欄紙、[飾物] ヲ髻、紅瑪瑙、香羅手帕、箭、金雀、白玉鴛鴦扇墜、[人物] 悟空妖怪等、太尉。	葉桂柳(2008)
現代	[錢幣] 古錢幣、五銖錢、金幣、銀幣、[獎章・獎牌] 獎章、記念章、勳章、軍功章、金牌、銀牌、銅牌、[竹簡、竹管] 漢簡、竹簡、蘆葦制作的簡、竹管毛筆、[戒指・印章] 金戒指、戒指、銅印、凶章、[器物・用具] 鉛球、孔雀石、手術縫合針、[棗類果実] 紅棗、[郵票商標類] 郵票、明信片、商標、[導彈・衛星・火箭・地雷等武器] 彈道導彈、通訊衛星、火箭、地雷、炸彈、炮彈、子彈、核武器等。	張万起(1998)

表1より、日本に伝わる前から、中国語において、「枚」はすでに高い汎用性を持つ量詞となったことと、中国語の「枚」の使用には、いずれの時代においても「薄くて平たい」という使用傾向が見られなかったことが確認できる。

2. 日本語助数詞「枚」——上代

上代日本語における助数詞「枚」の使用状況について、三保忠夫(2004)によると、木簡では、「木綿、紙、薬、水精玉、敷物の類、猪・鹿の皮、建築用材、金具、農具、また、食品の鮭、及び、蓮葉など」を対象として用い

助数詞「枚」の史的展開について

表2 上代における助数詞「枚」の使用状況

	紙	木材類 (板の類)	木材類 (板の類以外)	帙・綵帙・竹帙など	軸・梨軸・玉軸など	疊・席・薦など	金具・刀子・生銅など	鐵・牙籤・白木籤・占	菩薩座花枚などの花枚	烟子・烟葉	金薄・銀薄・銅薄	玉	木綿・冠・手巾など	餅	瓦	皮・革	盤	呵梨勒・檳榔子・无食子	軸端	菩薩光・仏光	その他	合計	
養老令							1						1									7	9
日本書紀							3									7	1					8	19
風土記 (逸文を含む)							1															1	2
正倉院文書	20717	503	65	510	295	289	232	83	77	55	50	45	24	26	23	14	19	12	11	10	120	23180	
唐大和上東征傳													1										1
万葉集																						1	1
	20717	503	65	510	295	289	237	83	77	55	50	45	26	26	23	21	20	12	11	10	137	23212	

られ、正倉院文書では「紙、軸、経帙、籤、冠、餅、瓦、板、角金、玉、犀角、象牙」などに使われている⁶⁾。ただし、正倉院文書における「枚」の各用法について、用例数が示されていない。そこで、本論文では、正倉院文書を含め、上代の文献について再調査を行った。助数詞「枚」の使用状況は、表2のようになる⁷⁾。

助数詞「枚」は上代では、すでに多用される助数詞である。対象物の材質は「紙」「木材」「金属」「玉」「皮」「木綿」など多岐に分かれ、形状から見ると「紙」「皮」「疊」「盤」「盾」など〈薄く平たい〉形のものがある一方、「軸」「真珠」「杖」「鉾」「釘」「紫檀木畫挾帙」など明らかに〈薄く平たい〉形を有しないものも存在する。また、表1に示した中国語の量詞「枚」の使用状況と照らし合わせてみると、「紙」「軸」「瓦」「餅」「席」「手巾」「盤」「刀」「玉」など、上代の助数詞「枚」の使用対象のほとんどは、唐代及びそれ以前の中国語量詞「枚」の用法に見られ、全体として、中国語の汎用的量

6) 三保忠夫 (2004) 204-217頁、同373-377頁を参照。

7) 本論文の表2から表6では、用例数で上位20位の対象物の使用状況を示し、用例数で上位20位以下のものを「その他」に纏めている。本論文の調査範囲は王鼎 (2016) 「助数詞「葉」の史的展開について」(『学芸国語国文学』第四十八号) に準じる。

詞「枚」の用法を受け継いだものと認められる。上代の助数詞「枚」は、すべてのものを対象に自由に使える汎用的な助数詞と見るより、基本的には中国語の量詞「枚」から学習した用法で用いられていた助数詞であるとするべきであろう。とはいえ、多くの〈薄く平たい〉ものを対象とし、次の正倉院文書の例にもあるように、「材木類」を数える際に、日本語の助数詞「枚」は、主に「板の類」を中心に使われているという現象も観察され、〈薄く平たい〉ものを数えるという意識も既に芽生えていると考えられよう⁸⁾。

1) 柱七十四根 桁八十枝 [中略] 長押十六枝 博風廿枝 棉栢卅七枝 角木四枝 束柱四根 架三百六十三枝 佐須九枝 扇廿七枚 戸調度八十七枚 歩板百卅八枚 箒子十七枝 樋二隻 中取料波多板二枚 比蘇二百廿八枝 (正倉院文書續修三十五裏「造石山院所解案」、古文書16P187L7-L10)

3. 日本語助数詞「枚」——中古

本論文で調査した中古の資料では、助数詞「枚」は表3のように使われている。

中古において、助数詞「枚」は、上代から多くの用法が受け継がれ、各種の文献において、多用されている助数詞である。使用対象には「紙」「畳・席・薦」「板の類」「瓦」「皮・革」「盤」など〈薄く平たい〉ものが多くあると同時に、上代の用法の名残または中国の汎用的な量詞「枚」の影響を受けたものも含め、「卵」「真珠」「犀角」「呵梨勒」など〈薄く平たい〉形を有し

8) 『時代別国語大辞典 上代編』によると、上代から漢字の「枚」はすでに「ひら」という訓があり、また『日本書紀』の平安時代の古訓において、「枚」は同じ〈薄く平たい〉ものの助数詞「張」とともに、「ヒラ」と訓ずることも、同辞典「上代語助数詞一覧」の用例から見て取れる。助数詞以外では、調査した上代の文献では、「枚」は、語素として「枚金」「枚坏」などの言葉を構成している。その際にも〈薄く平たい〉という意味を付与していると解せる。助数詞「枚」の〈薄く平たい〉という使用意識の形成を考察する上で、早い段階で漢字の「枚」に和語の「ひら」が訓として結びつけられたことも看過できない。

助数詞「枚」の史的展開について

表3 中古における助数詞「枚」の使用状況

	紙	疊・席・薦など	材木類 (板の類)	材木類 (その他)	瓦	皮・革	金属・金具	盤	刀子	木綿・頭巾・冠など	合子・花宮	金人像・土偶人	餅	桶	櫛・梳	箕	杵	呵梨勒・綿種・桃など	金薄・銀薄・銅薄	ヒ・匙(さじ)	龜甲・鼈甲	犀角・鹿角・羚羊角	その他	合計	
古典文学	17	9	1	1					1				5					1					13	48	
史書類	1		3	1	3				1			1						1					26	37	
古文書	1521	144	217	6	123	57	31	26		30	37		29	2			1	17	9	9	1	11	275	2546	
古記録	652	481	1	4		41		22	1		3		5		4					4				97	1315
延喜式	20	730	30	43	18	16	59	26	70	29	4	40	1	30	27	29	26	8	17	9	20	10	339	1601	
	2211	1364	252	54	142	117	90	74	72	60	44	41	40	32	31	29	27	27	26	22	21	21	750	5547	

ないものも併存する。

中古の助数詞「枚」の使用意識を推し量るには、興味深い二つの現象が見られる。一つは、材木類を数えるとき、使い分けを行い、「板の類」に「枚」を用いるという傾向が見られることで、もう一つは、仏教説話を翻訳した際、原典にある「舍利」を数える「枚」を翻訳の際、「粒」などほかの言い方に置き換えたという現象である⁹⁾。〈薄く平たい〉ものには「枚」の使用が積極的であると同時に、〈薄く平たい〉形を有しないものに「枚」の使用に消極的であるという使用意識も観察され、〈薄く平たい〉ものを数える意識が一層明確になる。

4. 日本語助数詞「枚」——中世

本論文で調査した中世の資料における助数詞「枚」の使用状況を以下に示す。中世における助数詞「枚」の用法は、中古のそれを受け継ぎながら、全体としては、〈薄く平たい〉形のを数えるという性格が中古よりも顕著

9) 山田孝雄など校注日本古典文学大系『今昔物語集』第2冊423頁の補注では、中国側の原典にある「舍利」を数える「枚」を、『今昔物語集』において、「粒」などほかの言い方に置き換えた現象も指摘されている。

表4 中世における助数詞「枚」の使用状況

	紙	疊・席・薦など	餅	材木類 (板の類)	材木類 (その他)	金属・金具	皮・革	折敷	籠	盤	扇	金薄・銀薄・銅薄	合子・宮	瓦	刀子	障子	木綿・絹・麻など	楯	櫛・彫櫛	簪・刺羽	その他	合計
古典文学	26	9	8	1			1	1				2	1					3	1		28	81
史書類	3	2		1			17	3													3	29
古文書	1408	817	883	202	20	149	66	68	76	36	25	30	18	26	20	20	18	13	12	13	274	4194
古記録	295	272	2	4			11	10	2	21	8		12							1	40	678
	1732	1100	893	208	20	149	95	82	78	57	33	32	31	26	20	20	18	16	14	13	345	4982

になっている。

調査の範囲で、中世の資料において、新たに確認できた対象物は、「(鎧の)草摺」「(鎧の)札(さね)」「肋骨」がある。

2) 草摺ヲ一枚宛射サセテ、通ラヌサネヲ一枚マゼニ拵テ威タレバ、(『太平記』卷第三十三、古典文学36P263L2)

3) 刀ヲ抜テ逆手ニ取直シ、左ノ脇ニ突立テ、右ノ小脇ノアバラ骨二三枚懸テ搔破リ、(『太平記』卷第十八、古典文学35P245L2)

「草摺」は鎧の胴の附属具で大腿部を守る前後左右の四枚からなる平面的なものである。「札(さね)」はよろいを構成する細長い小板のことで、「一枚マゼ」とは、鉄の札一枚と革の札一枚を交互に用いる拵え方である。なお、本論文では固有名詞と判断し、用例数に計上しなかったが、中世の文献に見られる「三枚兜」「五枚兜」という言葉は、兜の鍔(しころ)の板が「三枚」「五枚」連ねたものを言う。一方、「肋(アバラ)骨」について、中国側の文献で、「虎頭骨」「掌骨」「人肋骨」など、「骨」を「枚」で数える例が一部では存在するが¹⁰⁾、有力な用法ではなく、また、日本語において、「骨」の中でも「肋骨」を特定して対象とすることから、本論文では、中国の用法の影

10) 唐代道宣著『續高僧傳』卷第二十七に「臂掌骨五枚」(「SAT大正蔵」)、唐代孫思邈著『備急千金要方』卷九に「虎頭骨一枚」、北宋時代李昉等編『太平廣記』卷三百四十一に「六七枚人肋骨」(『四庫全書』)の例がある。

響を受けたと見るより、日本語の〈薄く平たい〉ものを数える用法の延長線にあると考えたい。時代が下がるが『和漢三才図絵』の巻十一に肋骨の図があり、横に何枚も連ねた形で描かれ、正に鎧の「札」、「鍔」の板と同様である。「札」「鍔」「肋骨」を「枚」と数えたのは、武家のことばとして、同じファクターから生まれたのではないかと本論文は考える¹¹⁾。

5. 日本語助数詞「枚」——近世以降

調査した近世の資料における助数詞「枚」の使用状況を、以下に示す。

表5 近世における助数詞「枚」の使用状況

	銀・銀子	金・黄金	紙	皮・革	衣服類	鯛・鮒・比目魚など	畳・席・薦など	カクタの札	将棋の駒	障子・襖	簾・翠簾	歯	折敷・へぎ	皿・盃	材木類(板の類)	毛氈	人間	魚の肉等(三枚におろす)	草摺	瓦	盆	土器の破片	龍鱗	その他	合計
古典文学	35	30	118	6	18	15	19	16	8	4	1	3	5	5	2	1	4	4	3	2	2	2	2	21	326
徳川實紀(第一篇)	266	84	5	20	1	2									2	2								2	384
細川家史料(19-23冊)	27	25		7		2						2				1									64
廣橋兼胤公武御用日記(8、9冊)	63	36	9							2	5														115
	391	175	132	33	19	19	19	16	8	6	6	5	5	5	4	4	4	4	3	2	2	2	2	23	889

近世では、助数詞「枚」の使用は、活発的である。前代からの「紙」「皮・革」「畳・席・薦」「簾」「折敷」「材木類(板の類)」「瓦」「衣服類」などを数える用法が引き続き見られる一方、「銀・銀子」「金・黄金」「鯛・鮒・比

11) 「肋骨」を「枚」で数えることにつき、陶萍(2014)では「あばら骨全体に焦点を当てると、「枚」で数えられないことはないだろう」と見ているが、同論文で引いている「左の肋骨二枚」(『曾我物語』)の用例からも、肋骨の「全体」で「枚」で数えているものではないことが分かる。

目魚など」「カルタの札」「将棋の駒」「歯」「毛氈」などに用いる用法も近世において一般化している。さらに、役者などの人間も「看板・番付」の助数詞「枚」で数えるなど、比喩的な用法も現れている。

近・現代においても、助数詞「枚」は、有力な助数詞の一つで、〈薄く平たい〉もの一般を数える助数詞として用いられている。その〈薄く平たい〉という使用意識は、文部省編輯局『語彙』、大槻文彦著『言海』以下、多くの辞書類にも記述されるようになる。

まとめ

ここまで、助数詞「枚」の史的展開について考察した。それを整理すると、以下のようになる。

(1) 助数詞「枚」の源流

日本語の助数詞「枚」は、中国の汎用的な量詞「枚」の用法を継承したところから出発する。上代では、多様な使用対象を見せるが、全体として、中国語の量詞「枚」から学習した用法で用いられ、結果的には、数える対象には〈薄く平たい〉ものもあれば、〈薄く平たい〉形を有しないものも多く存在する。

(2) 〈薄く平たい〉という使用意識の芽生え

上代においては、助数詞「枚」の使用対象は、必ずしも〈薄く平たい〉ものではない。また、〈薄く平たい〉ものであっても、必ずしも〈薄く平たい〉がゆえに「枚」が使われているわけでもない。それでも、「枚」の使用に〈薄く平たい〉ものを数えるという意識の芽生えが確実に観察できよう。「材木類」を数える際に、上代では、日本語の助数詞「枚」は、主に「板の類」を中心に使われているという現象がその証である。

(3) 〈薄く平たい〉対象物以外の用法の縮小

上代の諸用法のなか、中古・中世になると、〈薄く平たい〉ものを数える用法が継承され、〈薄く平たい〉形を有しないものを数える用法が廃れる一途を辿る。中古では、仏教説話を翻訳した際、原典にある「舎

利」の量詞「枚」を翻訳する際、「粒」などほかの言い方に置き換えたという現象が見られ、〈薄く平たい〉形を有しないものに「枚」の使用に消極的になっているという使用意識が窺える。中世になると、〈薄く平たい〉対象物以外の用法がさらに減り、〈薄く平たい〉形のものを数えるという性格が中古よりも顕著になっている。

(4) 〈薄く平たい〉ものの範疇内における用法の拡張

上記の〈薄く平たい〉対象物以外の用法の縮小と対照的に、〈薄く平たい〉ものの範疇において、助数詞「枚」の使用は、古い用法に囚われず、用法の拡張を見せる。中世では新たに「(鎧の)草摺」「(鎧の)札(さね)」「肋骨」を対象とし、近世では、「銀・銀子」「金・黄金」「衣服類」「鯛・鮎・比目魚など」「カルタの札」「将棋の駒」などを数える用法も一般化する。近・現代において、新しく現れた文物は、〈薄く平たい〉ものであれば、どんどん助数詞「枚」が適用される。「枚」は、伝承によりもたらされた使用範囲を超え、〈薄く平たい〉もの一般を数える助数詞となった。

(5) 更なる用法の発展

その他、本来〈薄く平たい〉ものである「看板・番付」の板を「枚」で数える用法に由来し、役者などの「人間」も「枚」で数えるようになるなど、用法の発展も見せた。

以上のように、日本語の助数詞「枚」の使用には、縦軸には伝承の力と、横軸には〈薄く平たい〉という使用意識による用法の再統合の力が観察される。また、伝承の力は、それぞれの用法の使用量をもって存在すると本論文は考える。

参考文献

- 洪藝芳 (2000) 『敦煌吐魯番文書中之量詞研究』文津出版社, pp.244-251.
張万起 (1998) 「量詞「枚」的產生及其歷史演變」『中国語文』1998年第3期, pp.208-217.
陶萍 (2014) 「助数詞「枚」の使用過程について—上代から近世まで—」『平安文学研究・衣笠編』5, pp.53-65.
鄧幫雲 (2005) 『元代量詞研究』(四川大学修士論文), pp.24-25.

- 彭文芳（2001）『元代量詞研究』（広西師範大学修士論文），pp. 32-47.
- 三保忠夫（2004）『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』風間書房，pp. 204-217, pp. 373-377.
- 游黎（2002）「唐五代量詞研究」（四川大学修士論文），pp. 92-99.
- 葉桂彬（2008）『明代漢語量詞研究』岳麓書社，pp. 217-221.
- 李建平・張頌成（2009）「泛指性量詞「枚／箇」的興替及其動因——以出土文獻為新材料」
『古漢語研究』2009年第4期，pp. 64-72.
- 劉月艷（2013）『宋代名量詞研究』（南京師範大学修士論文），pp. 67-68.
- 劉世儒（1965）『魏晉南北朝量詞研究』中華書局，pp. 76-82.

王鼎 Wang Ding 蘇州大学外国語学部准教授 専門：日本語学・漢語語彙